

御伽草子、その一

天袋衣の隙間

錦織 近

—なんでかねえ。

半月ほど前から、ソヨは妙に思っていることがあった。天袋の引き戸がいつも僅かに開いており、閉めたと思っても、気がつけばまた開いているのだ。

はて、これはいったいどういうわけか。ソヨがこのことに気づいたのは、手足が痺れるほど寒い冬の晩のことだった。半纏を肩にかけ、手をすり合わせるように揉みながら裸電球の灯りを消そうとして、ふと、その向こうの天袋に目がいった。開けたはずもないがと訝りながら、背伸びをしてコトリと戸を閉めた。その瞬間肩にかけていた半纏がすりと畳に落ち、それを拾おうとして前かがみになったソヨは、やれやれと、再び半纏に袖を通して部屋の戸を開けた。そういえば玄関のガラス戸に鍵をかけ忘れていたのではないかしらん。天袋の戸が開いていなければ気づくこともなかった余計な心配に、ソヨは眠気を覚まされたのだった。

ついでに小用を済ませてから寝床についたソヨは、かじかんだ手足をすり合わせるのに一生懸命で、天袋のことはすっかり忘れてしまった。別段、気に止めることでもなかったのだ。

再びそれに気づいたのは、四、五日、いや一週間ほど経ってからのことであったか。

そのときもまた、ソヨは床につこうと裸電球に手を伸ばし、天袋の戸が開いているのに気がついた。この前しっかり閉めたはずだが—そう思うとすぐさま閉める気になれず、天袋の下まで行って、戸が開いた一、二センチの隙間をじっと見つめてみた。屋根の外から吹き込む風が、その隙間を伝わって、ソヨの部屋へと寝息のように漏れてくる。隙間の奥の闇から何かが覗いているような気がして、ソヨは少しばかり間が抜けた感じに見える開き気味の左右の眉を、思わず八の字に寄せた。

—なんだか気味の悪いこと。

かといって、戸を開いて中を確かめる気にもなれず、しばらく隙間を見つめていたソヨは俯き加減に小さく首を振ると、諦めたような面持ちで戸を閉めたのだった。

それからというもの、同じようなことが度々あった。寝床につくときばかりではない。朝、布団の中で空ろに開いた目がそれをとらえたこともあったし、掃除をしているとき、振りかざしたハタキの先に見つけたこともあった。あるときは台所でぬか床をかき回していて、ふと気になって部屋に行ってみると、やはり戸が一、二センチばかり開いていることもあった。そのたびにしっかりと閉めるのだが、しまいには伸ばした右手の指がしなるほどにきつく、きつく念を押して閉めるのだが、なぜか、つぎに気づいたときには引き戸はまるでそんなソヨをせせら笑うかのように、一、二センチの隙間を見せているのであった。

たいがいの場合、天袋にはふだんは決して日の目を見ることのないもの、それでいてどうにも捨てるわけにはいかないものが眠っている。たとえば先祖から伝わる由緒のあるらしい掛け軸、おじいさんが若い時分に愛用していたという写真機、ひいおばあさんが嫁入りのときに持ってきたという何本かの高価そうな反物…。

しかし、自分の家の天袋に何が入っているかを、ソヨは知らない。

ソヨは、五年前にここに越してきた。それ以前に住んでいたのは仕事先の主人から与えられ

た三畳一間の部屋であり、そこから新しい住まいに引っ越すにしても、運び出す家財などたかが知れている。隙間風と雨漏りのするオンボロ住まいに精一杯の家財道具を持ち運んだところで、納戸も押し入れも、そして天袋も、しまうものなどないのであった。かくして天袋の戸は決して開けられることのないまま、年月が過ぎた。ソヨが移り住む前の住人がそこに何をしまっていたかなどソヨは知る由もなく、また、ソヨ自身、そんなことにはまったく興味を抱かぬまま、五年という歳月を過ごしてきたのであった。

――あの天袋には、いったい何が入っているのだろうか。

最初に確かめておかなかったことを、悔やまずにいられない。そしてその思いはいつしかいたずらな妄想をつくりだし、天袋にはこの家の守り神が住みついているのではないか、いや、もしかしたら自分が見たことも聞いたこともないような化け物が巣つくっているのではないかなどと、あらぬ考えが眉間あたりに浮かび、そのたびに「馬鹿らしいことだ」と思いなおして引き戸を閉める、そんなことを繰り返すソヨであった。

冬将軍が旅支度をはじめた。新しいことが待っていると、誰かとどこかに行くとか、そんなアテなど一つもないソヨではあるが、日に日に流しの水が温んでくることは、やはり嬉しい。小さな春は、ソヨの無表情な心にも、霜を溶かすくらいの温もりを感じさせてくれるのだった。

ことさらに温かい、日曜の午後。これといってすることもなく、ぼんやりと縁側に腰掛けていたソヨは、ふと、いまだに半纏を肩に掛けている自分に気づいた。庭の木蓮は小さな芽をつけ、その成長を見守るようにやさしい光が降り注いでいる。季節が変わりつつあることを目の前の光景が教えてくれているというのに、自分はどうか。ソヨはなんだか自分が流れるときの中で置いてきぼりを食らっているように感じて、惨めになった。恥ずかしくなった。

――そろそろ半纏も用なしだねえ。

誰に見られているわけでもないが、恥ずかしさをごまかすように敢えて明るくつぶやきながら、ソヨは半纏を肩からおろした。

ひざの上に軽くたたんだその半纏をあらためて眺めてみると、情けないほど綿が痩せている。思えばずいぶん着古したものだ。一度綿を打ちなおしたことがあったが、それもいつのことだったか思い出せない。毎年の寒さを、まるで自分の皮膚のように一緒に過ごしてきた朱色の半纏を、ソヨはしばらくの間、愛しそうになでていた。

ソヨは、つぎに同じように温かな日が来るのを待って、半纏の打ち直しに取りかかった。まずは、半纏の縫い目をほどく。元来、器用な方ではない。小さな裁縫バサミでピン、ピンと少しずつ縫い目を切り開くのだが、うっかりすると糸ではなく、布地まで切ってしまうようになる。前にやったときはもう少し要領よくできたものだけれど…。そう思うと、自分の指先がまどろっこしく、歯がゆい。裁縫上手ならなんなく終えてしまうだろう作業ではあるが、ソヨにとっては厄介で、根気の要ることだった。

ようやくすべての縫い目をほどこき終わると、気持ちまでもハラリとほどけたように、心地よい眠気が襲ってきた。ぼろ雑巾と化した半纏の皮の部分と、長い年月をかけて汗を吸い続けたためにすっかり生気を失った綿の部分が、ソヨのひざ元に広がっている。

—あれまあ、これが半纏だったなんてえ。

散らばった布と綿と糸くずを見つめながら、遠い昔に想いをはせるかのような優しい笑みを浮かべたあと、ソヨは大きな欠伸を一つして、なだれるように畳に横たわった。日差しを遮られた畳に頭を置き、日差しを容赦なく浴びる方に足を伸ばした格好なので、睡魔は躊躇うことなくソヨの全身を這う。新しい綿を入れて半纏を縫い直さなくちゃ、という思いが脳味噌から手先に伝わる間もなく、ソヨは眠りの底を求めて深く深〜く沈殿してゆくのであった。

小1時間ほど眠っただろうか。頬をさする薫風に、ソヨはうっすら目を開けた。

—おやおやいけない、いつの間に眠ってしまったのだろう。

かといって別段慌てる風もなく手元に落ちていた縫い針を拾い上げると、ソヨは再び閉じてしまいそうな瞼に「こら、こら」と力を集中させて、やっところさ、柱時計の針に焦点を合わせた。

ほつれた前髪のすだれ越しに見える時計の針は、すでに午後三時近くを指していた。何時に寝たかは覚えていないが、上瞼の重さと朦朧とした意識、気だるい肢体が、眠りの短さ、浅さを思わせる。

未だ眠りに操られているかのような重たい首を、空ろに右の方へ回したそのとき。ソヨの目は、天袋の戸がゆるゆると閉まるのを見た。ソヨの耳は、天袋の引き扉が閉められる瞬間のコトリという小さな音を聞いた。そしてそれから数秒ほどして、閉められた引き戸に挟まった一片の綿がスルスルと奥へと引っ張られるのを、ソヨのすべてが認めた。

—やっぱり何かいる。

そういえば、まだヒイバアチャンが生きていた頃、ソヨは聞いたことがある。

「柱が飴色になるくらい古い家の天袋には、小さな小さな人が住んでおるでね」。

小さな小さな人が住んでおるでね…。

小さな小さな人が住んでおるでね…。

ヒイバアチャンのしわがれた声が、耳の奥で聞こえる。その声がまるで血の道を伝うように、体じゅうを温くしていく。

—ああ、ヒイバアチャン、いたよ、いたよ、小さな人が。

熱くなった目頭から、ふいに涙が溢れる。一本、二本、三本と、涙の筋は絶え間なく頬を走る。ソヨはゆるりゆるりと右手を持ち上げ、天袋の方へと伸ばした。その手の先にいる「小さな人」を愛しむように、懐かしむように、ソヨは、右手を伸ばした。

ソヨは、たった一人だった。しんしんと寂しげに鳴く空気の中で、一人、さわさわとご飯を

食べ、一人、カアカアと家路を急ぐカラスの声を聞き、ときには一人、ジンジンと冷える身体を抱いて「寂しいよォ」と声を殺して泣くこともあった。

けれども天袋の「小さな人」をおぼろげに知って以来、ソヨはもう、孤独をまとうことがなくなったのだった。